



# 子育て通信 カナリヤ

発行 第324号 2022. 11. 1.

時津町子育て支援センター『こばとの家』

長崎県西彼杵郡時津町西時津郷 1000-10

支援センター TEL095-882-7455

保育園 TEL095-882-4559

FAX095-882-4901

ホームページ

<https://www.togitsukobato.jp>

## 『おなじ そらの したで』

～みんなのせかいのために～

ぼくたちは みんな  
おなじ そらの したで  
いきている

ここでも  
とおくでも  
いつでも  
どこにいても

つめたく こおった  
ゆきの うえでも

ぼくたちは  
みんな  
だれかと  
であう

かぜに ゆれる  
そうげんの なかでも

ぼくたちは  
あそぶ

そらに とどきそうな  
やまの うえで

はなが さく  
のはらで

ぼくたちは  
じゆうに うたう

どこまでも つづく  
うみを およぎながら

かぜを とらえて  
たかく  
とびながら

ふかく くらい  
もりの おくで

ぼくたちは  
あらしに  
みまわれる

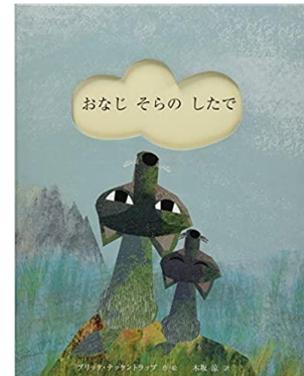
ながれの はやい  
かわの そばで

どんな ときでも

ぼくたちは  
そらを みあげる

そして おもう  
おなじ この そらの したで  
みんなが いきているってことを

ここでも  
とおくでも



「おなじそらのしたで」  
～作：ブリッタ・テッケントラップ～

時津こばと保育園

園長 嘉村 望

ウクライナがロシアに軍事侵攻され7か月が過ぎた今なお、収束は見えていません。ウクライナの首都の大規模な攻撃で多くの民間人が被害となり、妊娠6か月の女性も死亡しました。

9月に始まったロシアの部分的動員は戦争に反対する多くの人々が他国へ避難する人も多く、動員された人たちの悲惨な現状を伝える SNS の投稿が続いています。いつまでこうした戦いを続けていくのでしょうか。

ウクライナの子どもの約360万人が学校に行くこともできず、教育を受けられないだけでなく、子どもたちの精神的な影響は深刻な状況が続き、心的なサポートや教育など長期的な支援が求められます。

日本では、コロナ禍の制限も緩和され、自由な行動が取れるようになってきました。保育園や支援センター、学童の子どもたちの楽しそうに遊ぶ姿を見て、ウクライナの子どものことを考えると胸が痛みます。

同じ空の下で世界中の人の命が大切にされますように…。一日も早く平和な世界が訪れますように…。祈り続けたいと思います。



「男の子なのに泣かないの！」

(なぜNGなの?)

日本社会では「男の子は泣くものじゃない」というジェンダーバイアスがありますが、男の子だって泣いていいのです。子どもはありのままの自分を生きる権利があります。素直な感情表現は悪いことではありませんので、無理に泣き止ませる必要はありません。

(伝え方の方法として…)

まず、子どもを落ち着かせるために、抱きしめたり、背中をなでたりしながら、「イヤだったんだね」と気持ちを受け止めてから子どもに泣いている理由を聞いてみましょう。理由がわかったら、じゃあどうしたらいいかを子どもと一緒に考えましょう。



ジェンダーバイアスとは

人や社会が無意識のうちに性差や男女の役割について固定的な思い込みや偏見を持つこと

## 《あかちゃんへの「よかれと思って…」に注意しましょう！》

あかちゃんが喜ぶから、大人が目を離せるから、移動に必要なだから…そんな理由で使われる「容れ物（コンテナ）」のような育児用品。長時間の使用で赤ちゃんの発達に影響があることはあまり知られていません。

(位置決めまくら)

あかちゃんが寝がえりを打って、大人が目が届かないうちにうつ伏せになって窒息してしまう事故を防ぐまくら。寝返りという、あかちゃんにとって大事な運動機能の発達を妨げてしま可能性があります。

(あかちゃん用固定イス)

まだひとりでおすわりできない赤ちゃんのおしりから腰、背中をがっちりホールドし、お座りを援助するイス。視点が高くなるのであかちゃんは喜ぶますが、足腰が完全に固定され、自由が制限されてしまいます。

(ばね式ブランコ・歩行器)

あかちゃんを座面に入れておくことで、バネが働いて跳んだり跳ねたり、移動できたりを体験できる遊具。ハイハイやつかまり立ちするような目を離せない頃、大人は楽ですが、あかちゃんは足腰を使う機会が制限され、発達の機会を逃してしまう事になります。



乳幼児期は、あそびも生活も学びの時間です。大事な我が子を思っただけの行動が時には子どもの成長を妨げることもあります。発達の心配や不安もたくさんあることと思います。一人でかかえこまず誰かに相談することも大切です。そんな時は、地域の保健師さんや、子育て支援センターのスタッフ、通われている保育園の先生など身近でお話ができる人に相談してみてもいいかもしれません。